

読みの交流における授業者の役割

－「山月記」の学習－

増田 知子

1. 問題の所在

基調提案に挙げられているように、「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点からの学習過程の改善」が注目されているが、この場合の「深い学び」とは具体的にどのようなものであろうか。本校の国語科で昨年度までの3年間、「知識基盤社会」に対応する「総合的に考える力」を身につけさせることを目指して授業の中で行ってきたのは、「テキストの表現・言語事項・背景を結びつけて解釈し、既存の知識、実生活での体験、読書等の追体験を結びつけて考える」ということであったが、この「結びつけて考える」ことによって得られる「深い学び」というものもその一つであると考え。

「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」を目指す授業の中で読みの交流をさせていて感じるのが、学習者個人の学びは深まっているのかという点である。たとえば「山月記」を授業で扱う時、主題について考えさせることが多い。授業者が一つの主題にしぼることは主体的な学習にはならないと考え、読みの交流を行う。そこで学習者は自分とは違う読みを知ることにはなるが、その様々な読みをすべて認める中で、はたして学びが深まっているといえるのかということである。

主体的な学習を活かしながら学びを深めるには、「山月記」の学習では具体的に授業者のどのような働きかけが必要なのか。テキストの表現を結びつけること、「人虎伝」と比較すること、学習者から出された読みを対立させること等によって得られる「深い学び」というものに着目して考えていきたい。

2. 授業の実際

学年・組 高等学校Ⅱ年5組 42人(男子22人 女子20人)

教材 「山月記」中島敦 (『高等学校 現代文B』三省堂)
「人虎伝」(『新釈漢文大系44 唐代伝奇』明治書院)

- 学習目標
- 1 表現された人物や情景などを的確にとらえ、叙述に即して登場人物の心情や生き方を読みとる。
 - 2 読み比べたことについてグループで話し合い、交流を通して自分の読みを深める。
 - 3 自分たちの考えを根拠を示しながらわかりやすく文章にまとめる。

学習過程（全9.5時間）

第一次 「山月記」の読解（6時間）

- ① 第一段落を読んで、李徴の半生をまとめる。
- ② 第二段落を読んで、袁愴についておさえ、袁愴に出会った時の李徴の心情を読み取る。
- ③ 第三段落を読んで、虎となった李徴の現在の心情を読み取る。
- ④ 第四段落を読んで、李徴の袁愴への頼みごとをおさえ、李徴の詩について袁愴が感じた「どこか欠けるところ」について、どのようなものか考える。李徴の即席の詩にあらわれた心情を読み取る。
- ⑤ 第五段落を読んで、李徴は虎となった理由をどのように言っているか、読み取る。
- ⑥ 第六段落を読んで、李徴の言った「このことのほうを先にお願ひすべきだったのだ」について考える。「既に白く光を失った月」について考える。

第二次 「山月記」と「人虎伝」の比較【資料1】（1時間）

第三次 第二次でまとめた表を持ち寄り、「山月記」で作者が伝えたかったことを班に分かれて考える。（「人虎伝」との比較を根拠にする。）（1時間）

第四次 各班から出されたレジュメ【資料2】を読み、班ごとに紙面で他の班に質問カードを出す。【資料3】受けた質問に対して各班で話し合い、紙面で返答する。【資料4】（1時間）

第五次 「山月記」で作者が伝えたかったことをまとめる。このたびの学習について感想を書く。（0.5時間）

学習過程第四次でのやりとりは、次のようなものである。

- 作者がこの作品で描こうとしたものは何か。
- ◎ そう考える根拠
- ★ 質問
- ☆ 答え

1班

- 人間の内面のあり方と訓戒
- ◎ ・山月記は人虎伝に比べて李徴の考えや心情が詳しく描かれている。
・李徴の狷介さ（臆病な自尊心・尊大な羞恥心）が強くなり、それが元で虎になったとされている。
→具体例 職を探しに行っても歓迎されない。李徴の独白が多い。何か欠けている詩。月に向かって吠える李徴。
- ★ 訓戒とは具体的に何か。

☆ 李徴のように臆病な自尊心、尊大な羞恥心はいけないということです。

★ 「人間の内面のあり方」とは具体的に何なのか。

☆ 李徴のように自尊心を守るために他人との交流を断つということをせずに、他者と向きあい、自分の臆病な心に打ち克つということ。

2班

○ 李徴の人間性における残念さ。人間は誰しも心の中に猛獣を飼っている。

◎ ・「山月記」 詩 > 妻子 ←→ 「人虎伝」 妻子 > 詩

・精神的病で虎に

・詩に欠けているところ→人間味。詩は格調高く深淵感嘆する。

★ 「人間性における残念さ」とは何か。

☆ 臆病な自尊心と尊大な羞恥心にとらわれて切磋琢磨することを怠ったこと。妻子より詩業に重きをおくこと。

★ 詩に欠けているところと人間味はどう関係しているのか。

☆ 詩に欠けているところ＝人間らしさと考えました。

3班

○ 人間の内面(の本質)が、弱くてもろいために、それを隠しかばうために、身勝手に攻撃的な性情をうむということ。

◎ 人虎伝と比べて決定的な違いは、李徴の運命と思いが李徴自身の口から独白という形で語られていること。また、李徴のキャラクターも人虎伝に比べて山月記の方が現代的で人間らしく書かれていることから、読者が自らを重ね合わせやすいように作者が意識したように思える。

★ 攻撃的というのは作中のどこからわかるのか。

☆ 「妻子を苦しめ、友人を傷つけ」の部分から読みとれると思います。

★ 山月記の李徴はどういうところが現代的なのか。

☆ 李徴の思考や人格が現代的というよりは、序盤の李徴の説明が(作者目線での描写が)、人虎伝とは違って、現代人にも「あーそういう人いるよねーわかるー」ってなりやすい書き方がされてるかなって。

4班

○ プライドが高く自分が傷つきたくない為に他人との交流を絶つことは良くない。名前をあげたいのならば切磋琢磨しよう。

◎ この作品で李徴はプライドが高く傷つくことを恐れた為、人と交わらず最終的に虎になってしまう。李徴は反面教師なのだ。

★ 李徴が反面教師なのはわかるが、そこからどう変えればいいのか。プライドが高いのはしょうがない。

☆ 自分の才能を過信せず、努力をおこたらないようにする。

★ 二つ目についての根拠がないように思えるので教えてください。

☆ 才能がなくても、努力し、切磋琢磨すれば、名をあげることができるから。

5班

○ 人間の心のうちにあるものを抑えられない弱さと孤独。

◎ 性情→・山月記では妻子のことを後に心配している。
・山月記では自分の詩作のために仕事を辞めている。
・山月記では嘆き悲しむだけでなく、自嘲的に自分の非を語っている。

孤独→・李徴は再び仕事について後、自尊心を傷つけられている。
・李徴が一方的に語っている。
・息子に虎になったことを語るシーンがカットされている。

★ 心の内にあるものって何ですか。

☆ 自分の欲望やプライドなど、自分の外には表さず、あまり意識もしていないが、無意識に心の底に持っているどろどろとした部分のことです。

★ 「孤独」が出てきたのはなぜか。「弱さ」と「孤独」とのつながりを具体的に説明してほしい。

☆ 李徴が他人と交わることもせず、ひたすら自尊心を守ろうとしていたところや、李徴の最期を家族に知らされないまま終わったという点です。(自ら望んだことではありますが。)自分が弱く、もっと成長していかななくてはならないということ直視できないがゆえに尊大となり、結果として孤独になるのだと思います。

★ なぜ、息子に虎になったことを語るシーンをカットされていることが根拠になるのか。

☆ 親にとって息子、子どもというのは絶対に忘れられない存在であるが、李徴はその宝である人に対しては何も言っていないのである。その存在を忘れるくらい孤独になっているって感じ。

6班

○ 何かあやまちをおかしてしまっても、どれだけ早く自分のおろかさに気づいて改められるかで、その後の未来が少しはよくなるみたいな教訓。

◎ 人虎伝一虎になった時点で、自分のあやまちに気づいて、詩の話より先に妻子の話をしている。一妻子のその後が書かれている。

山月記一虎になっても、自分のあやまちには気づかずに、詩のことを妻子のことよりも優先している。妻子のその後についてはふれていない。

★ あやまちに早く気づいた「人虎伝」でも結局虎のままなのに、なぜ、未来はよくなっているといえるのか。

☆ 妻子のその後が書かれているので、妻子が救われた、つまり、李徴自身の幸せであると考えた。

7班

○ 尊大な羞恥心と臆病な自尊心を捨て、切磋琢磨することでしか才能を磨くことは

できず、そのことに若いうちから気付くことが重要だ。

◎ 李徴は虎になってからそのことに気付き、思いを伝えることもできなくなったので、早く自分の非に気付き改めていかなければならない。

★ 人虎伝のほうではそれを描くのに不十分だったのか。

☆ 人虎伝では心理描写が少ないので山月記ほど十分ではないと思います。

★ 比較してますか？

☆ 比較するのを忘れてました。

8班

○ 人間とは他人と関わることで成長するものだという事。

◎ 李徴は人と関わることを避けたが故に、臆病な自尊心と尊大な羞恥心を育てることとなり、虎の姿と成り果ててしまったから。自己中。

★ 人と関わることを避けたから臆病な自尊心と尊大な羞恥心が育まれたのではなく、臆病な自尊心と羞恥心によって人と関わることをさけたのではないか。

☆ 確かに。でも関わってないことがこじらせたのでは…と思ったからです。

★ 何が成長するのか。どんなふう成長するのか。

☆ 人間性…そう思っています。

9班

○ ・李徴の人間としての本能と理性

・李徴の人間性

・人間(李徴)の業の深さ

◎ ・虎になってもなお変わらない李徴。←性情

・人間であるときに色々と妻子を振り回していたにもかかわらず、虎になってもなお大成しなかった詩に執着しつづけたから

・人虎伝より李徴の言動や行動に重きを置いて描かれているから。

★ 李徴の人間性を描くことで中島敦は読者に何を伝えようとしていますか。

☆ わたしたちは、人間の業の深さだと考えました。

★ 業の深さとは具体的にどういうことか？

☆ 人間の時には妻子を振り回し続け、虎になってもなお諦めきれないほどの詩への執着を持つ李徴のどうしようもなさ業の深さであると考えました。またここでの「業」とは理性ではどうすることもできない心の働きとして考えています。

★ 李徴限定？一般化できない？

☆ 作品内で完結している話なので、この場合は一般化するのが適切でないと考えました。よってこのような文章になりました。

10班

○ 人虎伝より心情を重んじた描写をすることで、李徴＝人間の性情や、その弱い部分を描こうとした。

- ◎ ・心情の描写が多い。
- ・人虎伝よりも李徴はよりマイナス思考な(卑屈な)性格。
- ・虎となった理由は、李徴の性情によるもの。
- ★ 虎となった理由のところ、本当に李徴の性情だけが原因なのだろうか。(環境とか…)
- ☆ 主に性情が原因と考えたので、性情だけとは言ってないです。文章から読み取れること以外は確かでないので特筆しませんでした。
- ★ 人虎伝よりも李徴はマイナス思考になっているというのは、どこから分かるか。
- ☆ 李徴が自身の性情について語っているところです。

11班

- ・人間の心が抱えている弱さ。
- ・また、それによって人生が左右されていくということ。
- ・才能があっても努力をおこたってはならない。
- ◎ 李徴は臆病な自尊心と尊大な羞恥心によって友人らとの仲を断ち、努力をおこたり、虎になったが、李徴よりはるかに才能がないものたちはひたすら努力して、堂々たる詩家になったという描写があったから。
- ★ 人間の心が抱えている弱さとはどういうことか。
- ☆ 人それぞれだが李徴でいうと、臆病な自尊心と尊大な羞恥心。
- ★ 「努力」っていうのは、人と関わる努力、自尊心と羞恥心を捨てる努力っていう意味でしょうか。李徴が努力していないみたいを書いてあるけど、たぶん勉強とかそれなりに努力してるはずなんだろうなあと思いました。
- ☆ ほんとですね。ごめんなさい。どうやって書いたらいいですか？

12班

- 人間の漢の心の弱さ
- ◎ 山月記には人虎伝にはない、羞恥心、自尊心についての記述が書き加えられており、また妻子よりも詩を優先したところに心の弱さが表れている。人虎伝では詩について哀憐は感嘆しているが、山月記では超一流にはどこか欠けたところがあると書かれているので、自尊心などの心の弱さによって才能がさまたげられたと考えられるから。
- ★ 人間の漢←どういう意味ですか。
- ☆ 男の子、女性との区別。

次に学習過程第五次で行った「このたびの学習(「人虎伝」との比較から「山月記」で作者が伝えたかったことを考察する)をしてわかったこと、思ったこと、気付いたこと」として、学習者が書いたものをいくつか挙げる。

・自分の中では順序立てて「山月記」の主題を考察したつもりだったが、他人に説明しようとするのが難しかった。他人と意見を交流することは、他の意見を知る機会にもなるし、自分の考えを再整理するためにも良いと分かった。班の中で話し合いながら意見を言うよりも文章にして主張する方が難しいと感じた。(1班)

・自分たちの班があまり考えられていなかったことに気付いた。「山月記」は李徴の性情が描きたかったのではなく、李徴の失敗から読者に早く気付けと言っているのだと分かった。(2班)

・設問が難しくて悩みました。自分の意見をしっかり持っていないと、質問に答えづらかったし、持っても前提の考え方が違う人に意見を伝えるには色んな言葉の使い方をしなきゃいけないなと思いました。(3班)

・自分の中で分かっていると思っていても、分かっていることがある。他者の物事に対する見方と自分の見方に、いくつか相違点がある。聞かれると困るもんですね。(4班)

・作者は「山月記」で書きたかったことは、人間の心のうちにあるものを抑えられない弱さと孤独だと思った。なぜなら「山月記」では李徴が自分の詩作のために仕事をしたり、自分の非を自嘲的に語っているからだ。自分と李徴を照らし合わせてみても、自分が李徴の立場なら同じようなことをしてしまうだろうなと思った。(5班)

・活動するまでは、教訓を書きたかったのかなとしか思っていなかったのですが、活動することで考えをより深め、他の意見も思いつくことができ良かったです。(6班)

・他者から、自分たちの考えについて質問されることによって、今まで気付かなかった部分に気付くことができた。「自分の解釈→班の人の解釈→クラスの人の解釈」と多くの解釈に触れていくうちに、成長できた学習であった。(7班)

・他の班に質問をもらうことで、思いつかなかったところまで考えることができた。(8班)

・今回の学習を通して、私自身があまり「山月記」の内容(最終的に作者が伝えたかったこと)に関して理解できていないということを切に感じました。難しいです。また、質問されても、自分が自分の意見に納得しているわけではないため、回答するのがうまくできませんでした。「山月記」の解釈に関しては、やはり今でも自分の意見は変わっていないのですが、様々な意見を通して自分の意見を見直すことができました。しかし、よりこのお話が分からなくなりました。(9班)

・「山月記」で筆者が書きたかったものは、人間の性情や心の弱さであると思っていましたが、他の班の人たちの意見を見ると、違ったものも多くて面白かったです。「山月記」を教訓と考える人や、より共感しやすくするために書いたと考える人もいました。本当はどう思って書いたのかは、筆者にしか分からないことだとは思いますが、文章から読み取ろうとすることは国語力の向上に大きく役立つと思います。

(10班)

・みんなの意見はわりと違う。自分の意見の欠点などがわかる。(11班)

・「山月記」は教訓を唱えているものだということが分かった。生きていくうえで、

結果よりも大切なもの、人として必要不可欠な存在を大切にすべきだということを読み取った。(12班)

3. 分析と考察

学習過程第四次でのやりとりを見てみると、書き方は様々だが、人間の心の弱い部分を描こうとしたというとらえ方をしている班がほとんどで、「人虎伝」との比較により主題に迫ることができた。注目すべきことは、そこからさらに、1班・4班・8班・11班のように、「他人との交流を断つことはよくない。」「切磋琢磨することが大切だ。」のような教訓としてとらえている班がかなり見られることである。(6班は、「人虎伝」の主題という形で答えているが、これも教訓ととらえているものである。)

なぜ、教訓的な読みが出てくるのか。教訓的な読みが出てくるのは、李徴が虎になったという事実とそれを嘆く李徴の姿・心情が描かれていることから、こんな悲劇に遭わないためには、どうすればいいのかという意識が読み手の中に働くからだと考えられる。その教訓的な読みは本文中の、あるいは「人虎伝」との比較の、どういう点から出てきたのかを全体で確認する必要があったと思われる。

また、9班は「李徴の人間としての本能と理性。李徴の人間性。人間(李徴)の業の深さ」を主題としており、「李徴限定?一般化できない?」との質問に「作品内で完結している話なので、この場合は一般化するのが適切でないと考えました。」と答えている。この点についても、「作品内で完結している」とはどういうことなのか、全体で考える必要があったと考えられる。

第五次で学習者が書いたものを見てみると、漠然としていた自分たちの考えであったが、質問されることで自分たちの考えを見直すことができたという感想が多く見られる。気になるのが、「しかし、よりこのお話が分からなくなりました。(9班)」、や「自分たちの班があまり考えられていなかったことに気付いた。「山月記」は李徴の性情が描きかけたのではなく、李徴の失敗から読者に早く気付けと言っているのだと分かった。(2班)」

「山月記」は教訓を唱えているものだということが分かった。生きていくうえで、結果よりも大切なもの、人として必要不可欠な存在を大切にすべきだということを読み取った。(12班)のように、最初はこの小説の主題は「人間の心の弱さ」だと思っていたのに、他の班の意見を知って、教訓を言っているものだ最終的に思ったというものである。これについても例えば、「自分と李徴を照らし合わせてみても、自分が李徴の立場なら同じようなことをしてしまうだろうなと思った。(5班)」という学習者の受け止めに、全体に投げかける等の授業者の動きがあれば、単なる教訓とする解釈に揺さぶりをかけたり、「他の班の人たちの意見を見ると、違ったものも多くて面白かったです。(10班)」のような軽い受け止めに深めるきっかけになったかもしれない。

また、5班の出している「孤独」に全体で注目させ、「孤独」とは、どういうことか。李徴は最後まで孤独だったのか。について本文の記述をおさえながら考えるということも学習課題の一つに入れたい。その際、5班が根拠として挙げている「李徴が一方的に語っ

ている」にふれて、袁儻の人物像とこの小説における役割、李徴が語ることでできた理由、最後に虎となった自分の姿を見せようとしていることの意味などを繋いでこの小説の構成に目を向けさせ、作品をとらえることも可能である。

「山月記」の読みの交流の中で読みを深めるには、学習過程第四次の活動の最後に、全体で考える課題を共有する必要がある。

考える課題として、前述したものをまとめると、

- 1 「山月記」の主題を教訓ととらえた根拠はなにか。
- 2 「山月記」の主題を考えるにあたり、李徴限定と捉えたのはなぜか。
- 3 李徴は最後まで孤独だったのか。

というものが考えられる。1の「『山月記』の主題を教訓ととらえた根拠はなにか。」と、2の「『山月記』の主題を考えるにあたり、李徴限定と捉えたのはなぜか。」は、学習者から出た読みを取りあげ、対立させて考えさせる。3の「李徴は最後まで孤独だったのか。」については、学習者から出た読みを紹介してテキストに戻りテキストの表現を結び付ける。このような授業者の働きかけにより、読みを深めることができるのではないと思われる。このたびは班に分かれて考えたことに対し、発表という形を取らずに、質問カードでのやり取りという形を取った。それは、書くことで自分たちの考えをしっかりと整理し伝えるという学習目標に関わる点とともに、発表という形を取ると時間がかかるという問題もあった。しかし、発表という形を取れば、これらの点を学習者に共有させることができたと考え、時間の問題を解決する必要がある。

主体的な学習を活かしながら学びを深めるため、「山月記」の学習では具体的に授業者のどのような働きかけが必要なのか。という問題について、授業を振り返って考えてみた。読解の授業を行った後に、他の文章（「人虎伝」）と比較するという学習活動を入れることによって、主題を考えて自分たちの考えを根拠を示しながらわかりやすく文章にまとめることはできたと思われる。しかし、交流を通して自分の読みを深めることについては、学習者から出された読みをふまえてテキストの表現を結びつけること、学習者から出された読みを対立させるというチャンスがありながらそれを生かすことができなかった。

これらの学習活動を行うために、時間の問題を解決する一つの方法として、最初の読解の授業を行わずに「人虎伝」との比較から入るというものが考えられる。その場合、一読しただけではわかりにくいと思われる「山月記」の文章を個人で読み進めるのにどのような授業者の支援が必要なのかをこれから考えてみたい。